

マスコミ

本紙が読者にナリズムが歩んできた道と読まれる頃にして検証している。一千万部の発行部数を誇る新聞が「大義なき解散」あるいは「急襲解散」による衆議院議員選挙の結果が出ているだろう。ジャーナリズムへの道を築こうとしているところは興味深い。創業時の「読者のための新聞を今一度思い起してほしい」。

をめぐる日本社会に朝日新聞の二人の吉田(従軍慰安婦報道、福島原発事故調査)報道が大きな波紋を投げかけた。今年一年のマス・メディア界を漢字で表すと「欺」となるのか。

大石裕『メディアの中の政治(勁草書房)、逢坂厳『日本政治とメディア(新潮)』の登場からネット時代まで(中公新書)を紹介しよう。政治とメディアに関する研究書はそれほど多くない中で、大石はニュース・テキスト自体に権力的側面が備わっていることに着目し、事例分析として、自衛隊のイラク派遣と「世論調査」、水俣病報道や沖縄慰霊の日報道を検証する。

逢坂は政治(家)からのメディア圧力を中心に論じている。鳩山一郎から安倍晋三まで新聞、ラジオ、雑誌(テレビ)、インターネットと、メディア状況が変わるにつれて政治も変容を遂げてきたという。政治家と国民とのコミュニケーションのあり方を問う書である。今年創刊百四十周年を迎えた読売新聞について、高橋義雄『近現代日本政治と読売新聞-ジャーナリズムの使命を問い直す』(明石書店)も世論と新聞ジャー



◇「二人の吉田」報道◇

今年一年を漢字で表すと「欺」となるのか

鈴木雄雅

森沢真理(新潟日報論説編集員)『地方紙と戦争』(新潟日報事業社)は最近発見された文豪坂口安吾の長兄、坂口献吉社長の日記を基に戦前から戦後を生きたいた地方紙の壮絶な戦い

と苦悩を描いた。

さて、インターネットが登場し、社会的メディアとしてこれまでのマス・メディア研究が直面したところ、に問メディアの研究を導いた遠藤真が新著『問メディア社会のジャーナリズム-ソーシャルメディアは公共性を変えるか』(東京電機大学出版局)を上梓した。これまでの単著作ではなく、著者を含めて九人による編著である。ソーシャルメディアとマス・メディア

☆週刊読書人増刊号、好評発売中！
「日本の性(せい&さが)」

定価320(本体296)円、不定期刊(タブロイド判・16頁・オールカラー) 60日間委託商品

の対立はもはや過ぎ去り、ティヴなんて、幻想だ。」とグローバル化の勢いのなかで世界は動いているからだ。

そのインターネットが二〇二五年には世界で八十億人がつながるといふ。グローバル会長、エリック・シュミット『第五の権力』Googleには見えていない未来。長澤秀行編著『メディア来』(原題「The New Digital Age」)櫻井祐子訳、ダイヤモンド社)はその時、一人ひとりが「第四の権力」=報道から「第五の権力」を手に入れるかもしれないと語る。これからは人類が数千年かけて発達してきた「現実文明」と形になりつつある「仮想文明」の共存になるとも言うが(終章)「イスラム国」の出現やエボラ熱も今後十年間起きる激変の「予兆」に過ぎないのか。

右書が新しい力を手にする世界がいったいどこへ向かうのかを表すのに対し、伊藤明己『メディアとコミュニケーションの文化史』(世界思想社)は、人間が生み出したさまざまなメディアの発展を丁寧な解く。コミュニケーションを拡大し、豊かな文明を形成してきた歴史を振り返り、よい未来を考えるための入門書(同書帯から)である。また気鋭の社会学者ダナ・ボイドが「デジタルネイ・新聞学専攻

経済学者として活躍しているノーナ・ハーツ「情報を捨てるセンス」選ぶ技術(中西真雄美訳、講談社)はややハウツーものだが、専門家がいかにか誤りを犯しやすいかを前提に、最良の判断を磨く処方箋を示してくれる。混沌(カオス)の時代を受け入れることは今日の正しい決断が明日に正しい決断ではなく、曖昧になるほど簡略化したり、情報を楽に受け入れられるように誰かにかみ砕いてもらおうとする自身の欲望に立ち向かわなければならぬ」という教訓(エヒローグ)は、改めて個人と国家の緊張関係に二石を投じるのではないか。(すずき・ゆうが氏)上智大学文学部教授